九州大学 アジア・オセアニア研究教育機構(Q-AOS)シンポジウム

感染症と生きる

コロナから学ぶ
持続可能な社会とは

日時 2020 9/2［水］ — 9/3［木］

会場 オンライン開催

KYUSHU UNIVERSITY

KYUSHU UNIVERSITY INSTITUTE for ASIAN and OCEANIAN STUDIES Q-AOS

Kyushu University Asia Week

プログラム・スケジュール

日付	9/2（水）	9/3（木）			
会場 椎木講堂	コンサートホール	講義室１	講義室２	講義室３	コンサートホール
9：00					
9：30					
10：00		異分野融合セッションA 「教育」 ［日・英 同時通訳付］ ［オンライン配信］	異分野融合セッションB 「生活」 ［日・英 同時通訳付］ ［オンライン配信］	異分野融合セッションC 「経済」 ［日・英 同時通訳付］ ［オンライン配信］	
10：30					
11：00					
11：30					
12：00				（SDGsスコア贈呈式） ［日・英 同時通訳付］ ［オンライン配信］	
12：30					
13：00					
13：30					国際テレカンファレンス ［日・英 同時通訳付］ ［オンライン配信］
14：00					
14：30					
15：00	特別講演 ／招待講演 ［日・英 同時通訳付］ ［オンライン配信］				
15：30					
16：00					若手研究者セッション ［日・英 同時通訳付］ ［オンライン配信］
16：30					
17：00					
17：30					

【 DAY 1 】

九州大学アジア・オセアニア研究教育機構（Q-AOS）シンポジウム

<特別講演／招待講演>

<日　時>　　2020 年 9 月 2 日（水曜日）13:00-17:30
<場　所>　　オンライン形式、九州大学伊都キャンパス 椎木講堂 コンサートホール
<言　語>　　日本語 および 英語（同時通訳あり）
<テーマ>　　「感染症と生きる：コロナから学ぶ持続可能な社会とは」

<プログラム及び講演者>

時間	プログラム・講演者	
13:00-13:05	**開会挨拶** 久保　千春 機構長（九州大学 総長）	椎木講堂
招待講演		
13:05-13:35	**1．With コロナ時代の見取り図** 山本　太郎 教授（長崎大学 熱帯医学研究所 国際保健学分野）	オンライン
13:35-13:55	休憩	
13:55-14:25	**2．COVID-19 克服に向けた薬効を有するインドネシア天然素材を用いた戦略** Enos Tange Arung 教授（Mulawarman University）	オンライン
14:25-14:55	**3．新型コロナウイルス発生の裏にある"自然からの警告"** 五箇　公一 室長（国立環境研究所　生物・生態系環境研究センター　生態リスク評価・対策研究室）	オンライン
14:55-15:15	休憩	
15:15-15:45	**4．都市化するアジアにおけるコロナへの対策と都市復興のあり方** 是澤　優 本部長（国際連合人間居住計画（ハビタット）福岡本部）	オンライン
15:45-16:15	**5．コロナ時代の世界戦略：グローバル企業の視点から** 大本 晶之 執行役員 次世代事業開発本部長（丸紅株式会社）	椎木講堂
16:15-16:35	休憩	
特別講演		
16:35-17:20	**6. Pandemics and Protest: Covid-19 in Historical Perspective** Mark Harrison 教授（University of Oxford）	オンライン
17:20-17:25	**閉会挨拶** 荒殿　誠　副機構長（九州大学　副学長・理事）	椎木講堂

特別講演〈 セキュリティー・防災クラスター 〉

「Pandemics and Protest: Covid-19 in Historical Perspective」

Mark Harrison

Professor / Centre for the History of Science, Medicine and Technology, History Faculty; Co-Director, Wellcome Centre for Ethics and Humanities, Nuffield Department of Population Medicine, University of Oxford

Dr. Mark Harrison is a professor of the Oxford Centre for the History of Science, Medicine and Technology, Faculty of History, Oxford University. He serves as the Co-Director of the Wellcome Centre for Ethics and Humanities and as the Co-Director of the Oxford Martin Programme on Collective Responsibility for Infectious Disease. Prof Harrison has been a leading scholar in the field of the history of medicine in the former British colonies, especially in the British India. He has published many articles and books such as Contagion: How Commerce Has Spread Disease, and Public Health in British India: Anglo-Indian Preventive Medicine 1859-1914. He is currently working as a senior government advisor on the security and policing aspects of the pandemic in the United Kingdom.

概要

Pandemics have long been considered security risks. They present a wide variety of challenges to governments and large-organisations. One of these is their potential to generate significant levels of civil disorder, arising from both the effects of the pandemic and - more often - from the measures taken to contain them. Covid-19 is no exception and many countries have experienced waves of protest that are directly or indirectly related to the chaos, hardship and inequities caused by the pandemic. However, the nature of these protests differs in type and intensity from country to country. This lecture seeks to understand the dynamics of protest during the present pandemic and to determine to what extent these are unique or have historical precedent. History may offer some insight into how to deal with these challenges and those which may be yet to come.

招待講演　1〈 文化変動クラスター 〉

「With コロナ時代の見取り図」

山本　太郎
長崎大学
熱帯医学研究所　国際保健学分野
教授

概要

2019年12月（あるいは11月）に中国武漢で始まった新型コロナウイルス感染症の流行は、現代のグローバル化を体現するかのように、数ヶ月のうちに、世界各地に広がった。現在、感染者数は2000万人を超え、死亡者数は80万人を超えた。ロンドン、ニューヨーク、パリ、東京といった大都市で流行し、現在、流行の中心地は、メキシコやブラジル、インド、そしてアフリカへと移りつつある。
世界各地で都市封鎖が行われ、日本でも非常事態宣言が発出された。
パンデミックはこれまでも、社会変革の先駆けとなってきた。それは14世紀ヨーロッパのペスト流行時にも見られた。今回のパンデミックは、どのように収束し、今後、with コロナの時代に私たちはどういった時代を迎えるのか。そんなことをみなさんと一緒に考えてみたい。

招待講演　2〈 資源循環クラスター 〉

「COVID-19 克服に向けた薬効を有するインドネシア天然素材を用いた戦略」

Enos Tangke Arung

Professor /Faculty of Forestry, Mulawarman University（ID）

概要

2020 年の 7 月の時点で、世界中で、COVID19 の感染者は、1600 万人以上報告されており、収束の兆しが見えない。インドネシアでは、2020 年の 3 月に初めて、公的に感染者が報告され同年の 7 月末時点で、10 万人以上の感染者が報告されている。そのような状況の中、インドネシアではジャムウ生薬と呼ばれる伝統薬を用いた、COVID-19 に対する対策が注目されている。インドネシア保健相は、COVID-19 の予防・症状軽減に有効だと考えられる伝統薬ジャムウのリストを発表し、豊富な伝統的生薬での感染症対策に取り組んだ。それらには、ショウガ科に属するタムラワ、ウコン、ショウガ、さらに、コミカンソウ科のメニラン、キツネノマゴ科のセンシンレン、フトモモ科のグアバなどが含まれる。それらを受け、多くの研究機関は、COVID-19 に有効な天然物の探索に取り組んでいる。特に、ムラワルマン大学では、持病を有する患者の重症化リスクを下げるためにショウガ科のバンガライの研究や、COVID-19 の感染抑制に寄与するハリナシバチ由来蜂蜜製品の研究が実施されている。

招待講演　3〈 生存基盤環境クラスター 〉

「新型コロナウイルス発生の裏にある"自然からの警告"」

五箇　公一
国立環境研究所
生物・生態系環境研究センター
生態リスク評価・対策研究室
室長

概要

今回の新型コロナのパンデミックにより我々は感染症の恐ろしさを思い知らされた。こうした新興感染症の発生は今に始まったことではなく、1970 年代以降、増え続けているとされる。
そもそも、ウイルスなどの病原体微生物は、人間が地球上に登場する遥か過去から生物多様性の一員として進化を繰り返しており、それぞれに本来の生息域や自然宿主が存在する。
現代に入り、人間活動の肥大とともに、病原体の住処である自然環境に我々が過度に侵食を繰り返した結果、病原体と人間が遭遇する機会が増大し、病原体が人間社会にスピルオーバー（噴出）してパンデミックを引き起こしているとされる。
いわば、自然資源搾取型グローバル経済のツケが人間社会に回ってきたと言っていい。
新型コロナに限らず、気候危機がもたらす異常気象や自然資源の枯渇など、様々な自然災害が人間社会をこれからも襲い続け、我々は深刻な経済危機を迎えることになると考えられる。
このコロナ禍で我々は、これまでの生活スタイルを見直し、新たな経済・社会体制を目指して、様々な分野でのイノベーションを図る必要がある。

招待講演　4〈 都市クラスター 〉

「都市化するアジアにおけるコロナへの対策と都市復興のあり方」

是澤　優
国際連合人間居住計画（ハビタット）福岡本部
本部長

概要

新型コロナ（COVID-19）は健康危機にとどまらず、人道危機、経済社会危機でもあり、国際社会共通の「持続可能な開発目標（SDGs）」の進捗を遅らせ、その達成をより困難にしている。しかし、COVID-19 複合危機へ対処し、社会の復興・再生のため、SDGsはロードマップであり続けるべきである。
国連ではこのような複合危機に総合的な対応を行っており、①大規模且つ総合的な健康面での対応、②壊滅的影響を受けている人道、経済社会、人権などの危機への対応、③ビルド・バック・ベター、を柱としている。加えて、各国、地域、都市が直面する危機へ適切に対処し、また、危機からの回復・再生のガイダンスとして、各種の課題、社会的弱者グループ、地域に着目した政策指針を発信している。各国・都市では、危機対応から得られた貴重な経験・教訓、イノベーションの試行を重ねてきており、危機の継続が見込まれている中、なお一層の知識共有化と相互協力を推進していくことが国際社会にとって不可欠である。

招待講演　5〈 医療･健康クラスター 〉

「コロナ時代の世界戦略：グローバル企業の視点から」

大本 晶之

丸紅株式会社
執行役員 次世代事業開発本部長

概要

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、各国の経済活動は大幅に制限され、世界経済は急激に縮小しました。グローバルに事業を展開する丸紅も、国内･海外に関わらず、様々な領域のビジネスで大きな影響を受けております。また現在でも新型コロナウイルス収束の見通しは立っていないことから、あらゆる産業において既存のビジネスモデルが陳腐化する可能性があり、丸紅も With コロナ･After コロナに対応した戦略の見直しに迫られています。他方、コロナ禍によって、オンラインサービスや自動化などの新たな領域においてビジネスの機運が高まっていることも事実であり、丸紅はこの状況をチャンスと捉え、新たなビジネスモデルの事業開発を進めております。本講演では、新型コロナウイルスがもたらす環境の変化と今後の展望についての考察と、丸紅の新たなビジネス戦略について紹介させていただきます。

【 ２日目 】

分割セッションＡ：キーワード「教育」

〈テーマ〉　「ポスト・コロナ時代」における教育と学習の展望を探る

肥後 裕輝
九州大学 留学生センター
教授
／医療・健康クラスター

このセッションでは、新型コロナウイルス感染症（COVID−19）の世界的拡大という未曽有の公衆衛生・健康危機が及ぼす、高等教育機関における「教育と学習」への影響に着目する。コロナ禍におけるこれまでの教育や学習の在り方への影響に関する情報共有のみならず、このセッションでは、今後来るべき「ポスト・コロナ社会」において、このグローバル・パンデミックがもたらす課題および機会の両面を見据え、効果的な教育の提供と有意義な学習の機会の維持、またそれらの更なる改善に資するための議論をその主眼に据える。セッションの講演者として、大学教員のみならず学生、また国内（学内）のみならず海外機関の教員や外国人留学生も招き、多様な観点からの議論や意見を提供する。試験的・暫定的ながら、広く今後のポスト・コロナ社会において意義ある教育と学習の道を探りだすためのプラットフォームを提供することを目的とする。

分割セッションＡ：キーワード「教育」

<日　時>　2020 年 9 月 3 日（木曜日）10:00-12:00
<場　所>　オンライン形式、九州大学伊都キャンパス 椎木講堂 講義室 1
<言　語>　日本語 および 英語（同時通訳あり）
<テーマ>　「ポスト・コロナ時代」における教育と学習の展望を探る

<プログラム及び講演者>

時間	プログラム・講演者
10:00-10:05	**◆開会の辞** **パンデミック時代における教育と学習―序論** 肥後 裕輝 教授（九州大学 留学生センター／医療・健康クラスター）
10:05-10:20	**◆発表 1： 基調講演** **パンデミックが及ぼす研究教育への影響～シドニー大学健康科学部の経験から** Kate O'LOUGHLIN 准教授（University of Sydney／医療・健康クラスター）
10:20-10:35	**◆発表 2： 基調講演** **コロナ禍における大学の『バーチャル国際化政策』とその実践～マヒドン大学での課題と今後の展望** Nopraenue S. DHIRATHITI 准教授（Mahidol University／医療・健康クラスター）
10:35-10:40	**質疑応答**
10:40-10:55	**◆発表 3** **オンライン・グループ学習活動は上手くいくか？～ZOOM を活用したコラボ学習のケース・スタディから** 内田 諭 准教授（九州大学 言語文化研究院／セキュリティー・防災クラスター）
10:55-11:10	**◆発表 4** **新型コロナ時代における大学教育～テクノロジーとパワーおよび変容する高等教育の意味** Edward VICKERS 教授（九州大学 人間環境学研究院／文化変動クラスター）
11:10-11:15	**質疑応答**
11:15-11:30	**◆発表 5** **コロナ禍とポスト・コロナにおける大学教育～学部生の観点から** 平嶋 彩乃 氏（九州大学 共創学部 3 年）
11:30-11:45	**◆発表 6** **大学教育のパンデミック環境への適応～留学生および留学生団体代表の観点からの提言** Alexia NECTOUX 氏（九州大学大学院 生物資源環境科学府 博士課程 2 年）
11:45-11:50	**質疑応答**
11:50-12:00	**◆総括・閉会の辞** 肥後 裕輝 教授（九州大学 留学生センター／医療・健康クラスター）

開会の辞

「パンデミック時代における教育と学習―序論」

肥後 裕輝

九州大学 留学生センター
教授
／医療・健康クラスター

概要

新型コロナウイルス感染症のパンデミック化は、いわゆるグローバルな公衆保健危機のみならず、今後の私たちの日常生活や仕事生活の在り方に対し「期限無き根本的な変容」を迫っている大きな力学として猛威を振るっている。

このような環境の中、高等教育機関の主要な構成員である教員と学生は、今日パンデミックが及ぼしている教育と学習への影響を日々観察し考えながら、同時に今後の「ポスト・コロナ時代」において、如何により良い教育の提供や学習支援を可能にできるかについて思案することを止まない。

このセッションでは、国際性と多様性に富んだ発表者チームのプレゼンテーションを通じて、これらの普遍的かつ有意義な課題に試験的に且つ開拓的ながら回答していく。

発表１： 基調講演

「パンデミックが及ぼす研究教育への影響～シドニー大学健康科学部の経験から」

Kate O’LOUGHLIN

Associate Professor,
University of Sydney（AU）/ Q-AOS Medicine and Health Cluster

概要

他の主要国と同様に新型コロナウイルス感染症がオーストラリに及ぼしている影響は大きく、あらゆる側面で人々の活動の制限や変更を余儀なくしている。

このプレゼンテーションでは、自らが所属するシドニー大学健康科学部での具体的なケースに着目し、学部生および大学院生が直面している学習・研究活動における困難と課題について議論する。

健康科学の分野は、本質的に対面式の学習・研究・研究調査を前提としているため、感染症拡大防止のもとに広く実施されている遠隔授業やソーシャル・ディスタンシングによって生み出される、学生や研究者たちの困難は極めて顕著である。

この具体的なケースの紹介と議論によって、他の学部やシドニー大学以外の機関での例も広く示唆していく。

発表２：基調講演

「コロナ禍における大学の『バーチャル国際化政策』とその実践～マヒドン大学での課題と今後の展望」

Nopraenue S. DHIRATHITI
Associate Professor
Faculty of Social Sciences and Humanities
Mahidol University（Thailand）

概要

コロナ禍、そしてポスト・コロナ時代における大学教育と組織の国際化推進は、体制レベルのみならずその日常の現場・実践レベルにおいても極めて困難である。
体制レベルにおいて、大学間協定、海外留学プログラム、また国際研究連携などの維持と拡張の在り方の再検討が迫られている中、「ヴァ―チャル国際化」なる概念が現れ、その在り方と意義が議論されている。
日常の現場レベルにおける、教員、職員そして学生達は、この概念の主たる対象として、様々な面で今後の教育・研究・学習の在り方の変化を強いられる。
大学機関は、この「ヴァ―チャル国際化」の体現に向けて、それを可能とし維持するための新しい組織体制を導入し、適切な教育とトレーニングを施し、その安定的な運営の在り方におけるプロトコールを明確に定めることが必要とされる。

発表３

「オンライン・グループ学習活動は上手くいくか？～ZOOM を活用したコラボ学習のケース・スタディから」

内田　諭
九州大学　言語文化研究院
准教授
／セキュリティー・防災クラスター

概要

新型コロナウイルス感染症のパンデミック化は、大学機関における授業の画一的なオンライン化を促した。
授業のオンライン化は教育の基本フォーマットを根本的に変え、教員・学生共に過去に例を見ない環境の中で、日々手探りでその適切なあり方を模索している。
一方、20018 年春に創設された本学・共創学部では、コラボ・ラーニングと称する、学生がグループを作り、割り当てられた課題について各々協働的に取り組む学習法を取り入れている。
このプレゼンテーションでは、このコラボ・ラーニングの実際を説明すると共に、一担当教員の経験と観点から、この学習法のオンライン化における課題と改善点について議論する。

発表 4

「新型コロナ時代における大学教育～テクノロジーとパワーおよび変容する高等教育の意味」

Edward VICKERS
九州大学 人間環境学研究院
教授
／文化変動クラスター

概要

コロナ感染症の世界的拡大（COVID-19 Pandemic）は、高等教育のあらゆる側面に多大なる影響を及ぼしている。
教育側の観点からは、授業や会議また試験の包括的なオンラインへの移行だ。
これらの変容は、高等教育機関の財政的サステナビリティのみならず、そのミッションや社会的機能・役割の根幹的な意義にどのような変化を及ぼすのか？
「高等教育機関のミッションは、次世代の社会や経済を支える人材育成機関である。」と捉える立場からは、昨今のオンライン化は、その効率性や授業料の低下や教職員の削減など、主にコスト削減の観点から多様な利点があると主張する向きがある。
このプレゼンテーションでは、主に理論的な観点からこの様な捉え方に対する批判と共に、他の多様な観点からこれらの問題について議論する。

発表 5

「コロナ禍とポスト・コロナにおける大学教育～学部生の観点から」

平嶋 彩乃
九州大学 共創学部 3 年

概要

今般のコロナ感染症の世界的な拡大により、現代社会のあらゆる側面が影響を受けており、大学教育もその例外ではない。
このプレゼンテーションでは、自身の大学間交換留学制度を通じてオーストラリ留学に臨んだ経験（2020 年の 3 月に学期中にパンデミック化によりキャンセル帰国）と、本学でのオンライン授業を履修した経験、という個人的な経験に基づき、学部生の観点から、また国際比較の観点から、その影響と変化について論じる。
そして、今後のポスト・コロナ時代における大学教育がどのようにあるべきかについて、学生としての希望に基づいた提唱を論じる。

発表 6

「大学教育のパンデミック環境への適応～留学生および留学生団体代表の観点からの提言」

Alexia NECTOUX

九州大学大学院 生物資源環境科学府 博士課程2年

概要

2019 年 12 月に中国から発生・拡大したとみられる新型コロナ感染症は、2020 年 2 月初頭には日本にも拡大がおよび、様々な形で人々の日常生活に制限を掛けている。

広く大学生にとってもその影響は極めて大きく、ソーシャル・ディスタンシングの推奨と順守により、従来の学習や研究活動を支える基盤や慣行が大きく変容を遂げている。

本学では、幸いなことに、オンライン授業などの遠隔による学習活動を可能とする物理的なインフラは従来から存在しており、それへの形式的な意向はスムーズであった。

一方、授業の内容や質の観点からは、従来の対面式での質を維持しているとはいえず、教える側も教わる側も困難を感じて言えるのが実情と言える。

そして、外国人留学生が抱える困難は特に顕著であった。

このプレゼンテーションでは、本学大学院で学ぶ外国人留学生としての自信の観点から、本学を始め広く日本の大学機関が今後より効果的に学生の学習・研究活動及びその日常生活を支援するための改善策を提案していく。

分割セッション B：キーワード「生活」

〈テーマ〉　考古学・歴史学から見た人間生活と感染症

久保 智之
九州大学 人文科学研究院
教授
／文化変動クラスター

このセッションでは、まず巨視的に、人類の生活と感染症の関わりを、考古学の視点から見る。次に、時代と地域を限り、20 世紀ドイツにおける日常生活と感染症との関わりを、歴史学の視点から見る。

新型コロナウイルスに関する溢れるような情報の中にあって、タイムスパンの長い考古学の視点や、コロナに関しても日本とは状況がかなり異なるドイツの 20 世紀に関する歴史学的視点は、我々の感染症に対する認識を、豊かなものにしてくれるだろう。

分割セッション B：キーワード「生活」

<日　時>　　2020 年 9 月 3 日（木曜日）10:00-12:00
<場　所>　　オンライン形式、九州大学伊都キャンパス 椎木講堂 講義室 2
<言　語>　　日本語 および 英語（同時通訳あり）
<テーマ>　　考古学・歴史学から見た人間生活と感染症
<プログラム及び講演者>
◆司　　会：田尻 義了 准教授（九州大学 比較社会文化研究院／生存基盤環境クラスター）
◆コメンテーター：鬼丸 武士 教授（九州大学 比較社会文化研究院／セキュリティー・防災クラスター）

時間	プログラム・講演者
10:00-10:05	**◆開会の辞** 田尻 義了 准教授（九州大学 比較社会文化研究院／生存基盤環境クラスター） **◆講演者紹介** 久保 智之 教授（九州大学 人文科学研究院／文化変動クラスター）
10:05-10:45	**◆講演 1** **文明の始まりと感染症－農耕の拡散を中心に** 宮本 一夫 教授（九州大学 人文科学研究院／文化変動クラスター）
10:45-10:55	**◆質疑応答**
11:00-11:05	**◆講演者紹介** 久保 智之 教授（九州大学 人文科学研究院／文化変動クラスター）
11:05-11:45	**◆講演 2** **「不浄なるもの」との闘争―20 世紀ドイツにおける感染症の恐怖と敵の像** 今井 宏昌 講師（九州大学 人文科学研究院／文化変動クラスター）
11:45-11:55	**◆質疑応答**
12:00	**◆閉会の辞** 田尻 義了 准教授（九州大学 比較社会文化研究院／生存基盤環境クラスター）

発表 1

「文明の始まりと感染症－農耕の拡散を中心に」

宮本 一夫
九州大学 人文科学研究院
教授
／文化変動クラスター

概要

感染症の多くは、動物と人の関わり、すなわち動物の家畜化によって人社会にもたらされたと考えられてきた。動物の家畜化とは農耕の始まりを指す。農耕の始まりは、氷河期の終わりの環境変動期に多角的な生業戦略による定住社会の始まりと人口増加に起因する。さらに農耕の拡散は、農耕民の狩猟採集社会への移住という人の拡散によるものである。さらに、農耕社会の発展による都市の出現は、人の集住化とともに、交易や市場の出現による人の交流をもたらす。このような社会変化こそ、文明の始まりの必要条件であり、さらには物質文化の発展にとって必須のものであった。このような人の集住や交流さらには移動こそが、人を宿主とする感染症にとって、その広がりを可能にするものであり、宿命とでも言えるものである。本発表では、先史社会における結核やペストの拡散の諸例を述べ、人間社会の本質と感染症の関わりを考えるとともに、その共生の道を探って行きたい。

Presentation 2

「「不浄なるもの」との闘争―20 世紀ドイツにおける感染症の恐怖と敵の像」

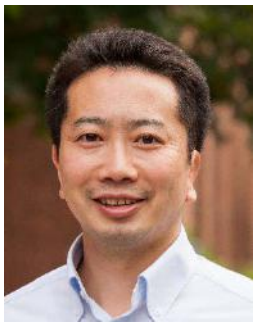
今井 宏昌
九州大学 人文科学研究院
講師
／文化変動クラスター

概要

19 世紀後半のドイツでは、医師ロベルト・コッホのもとで細菌学と感染症研究が飛躍的に進展した。これまで目に見えなかった脅威が顕微鏡を通じ可視化されたことは、感染症に対する人びとの知識を劇的に向上させると同時に、日常生活における「不浄なるもの」との「接触感染」の恐怖を呼び覚ました。そしてその恐怖は 20 世紀のドイツにおいて、フランス人やロシア人、そしてユダヤ人といった敵のイメージと結びつき、さらには「不潔な敵」に対する「清潔なドイツ人」といった自己イメージの形成へと展開していく。本発表ではこのプロセスを、当時の政治的言説やカリカチュアなどの検討を通じて明らかにしたい。

分割セッション C：キーワード「経済」

〈テーマ〉　With/Post コロナで生まれる新しい経済・地域・資源のかたち



清水 邦義

九州大学 農学研究院
准教授
／資源循環クラスター

黒瀬 武史

九州大学 人間環境学研究院
准教授
／都市クラスター

世界中で、新型コロナウイルスが猛威をふるっており、いまだに、収束の兆しが見えない。生活様式も大きく変えざるを得なくなり、1 年前とは、まったく異なる生活様式に移行しつつある。その中で、当然ながら、経済・地域・資源に関する考え方、価値感も大きく変化している。コロナ禍において、経済活動が低迷する中においても、未来を切り開くために、新たな取り組みが、様々なステークホルダーの視点で、活発化しつつある。無機や有機の天然資源の活用の仕方についても、新たな発想と付加価値化が求められている。天然無機資源の活用の一つとして、新たな発想での「風の吹かないエアコン」を用いたコロナ禍対応型の新規技術。アジアで最も生物多様性の大きいインドネシアの天然有機資源のコロナ禍だからこそ、再度注目されつつある古くて新しい機能に着目した活用。また、都市農業の役割も変化しつつあり、「半農半X」という新たな農ビジネスも注目され始めている。このような様々な地域の社会経済の変化に即した福岡の都市圏戦略。With/Post コロナで生まれるこのような新しい経済・地域・資源のかたちについて討議したい。

分割セッション C：キーワード「経済」

<日　時>　　2020 年 9 月 3 日（木曜日）10:00-12:00
<場　所>　　オンライン形式、九州大学伊都キャンパス 椎木講堂 講義室 3
<言　語>　　日本語 および 英語（同時通訳あり）
<テーマ>　　With/Post コロナで生まれる新しい経済・地域・資源のかたち
<プログラム及び講演者>

時間	プログラム・講演者
10:00-10:05	**◆主題解説** 清水 邦義 准教授（九州大学 農学研究院／資源循環クラスター）
10:05-10:25	**◆発表 1** **風の吹かないエアコン** 二枝 たかはる 代表取締役（FUTAEDA 株式会社）
10:25-10:30	**◆質疑応答**
10:30-10:45	**◆発表 2** **コロナウイルス感染症対策に向けたインドネシア天然物の活用** Enos Tange Arung 教授（Mulawarman University）
10:45-10:48	**◆質疑応答**
10:48-10:53	**◆主題解説** 黒瀬 武史 准教授（九州大学 人間環境学研究院／都市クラスター）
10:53-11:13	**◆発表 3** **With コロナ時代の都市農業の新たな可能性** 高取 千佳 准教授（九州大学 芸術工学研究院）
11:13-11:18	**◆質疑応答**
11:18-11:38	**◆発表 4** **Beyond Coronavirus（ビヨンド コロナウイルス）を見据えた福岡の都市圏戦略** 天野 宏欣 代表社員（Local Knowledge Platform 合同会社）
11:38-11:43	**◆質疑応答**
11:43-11:48	**◆まとめ** 清水 邦義 准教授（九州大学 農学研究院／資源循環クラスター） 黒瀬 武史 准教授（九州大学　人間環境学研究院／都市クラスター）

発表 1

「風の吹かないエアコン」

二枝 たかはる

代表取締役
FUTAEDA 株式会社

概要

新型コロナウイルスのパンデミックで世界全体の経済・産業が大きなダメージを被っています。
厚生労働省からも「新しい生活様式」が発表されるなど、これからは今までの習慣や常識とは違う生活様式になりつつあります。
その生活の中でも、冷房・暖房は我々の生活には欠かせない存在です。

そのような中、アメリカ CDC（疾病対策センター）からは、感染の広がりとエアコンに関する調査がおこなわれ、エアコンの風によってウイルスの飛沫感染が促進されている、とのエアコンでの感染リスクの報告があがっています。

そのような感染リスクを抑える「風の吹かないエアコン」の取組みについて事例を交えてご紹介させて頂きます。

発表 2

「コロナウイルス感染症対策に向けたインドネシア天然物の活用」

Enos Tangke Arung

Professor,
Faculty of Forestry, Mulawarman University（ID）

概要

2020 年の 7 月の時点で、世界中で、COVID19 の感染者は、1600 万人以上報告されており、収束の兆しが見えない。インドネシアでは、2020 年の 3 月に初めて、公的に感染者が報告され同年の 7 月末時点で、10 万人以上の感染者が報告されている。そのような状況の中、インドネシアではジャムウ生薬と呼ばれる伝統薬を用いた、COVID-19 に対する対策が注目されている。インドネシア保健相は、COVID-19 の予防・症状軽減に有効だと考えられる伝統薬ジャムウのリストを発表し、豊富な伝統的生薬での感染症対策に取り組んだ。それらには、ショウガ科に属するタムラワ、ウコン、ショウガ、さらに、コミカンソウ科のメニラン、キツネノマゴ科のセンシンレン、フトモモ科のグアバなどが含まれる。それらを受け、多くの研究機関は、COVID-19 に有効な天然物の探索に取り組んでいる。特に、ムラワルマン大学では、持病を有する患者の重症化リスクを下げるためにショウガ科のバンガライの研究が実施されている。そのようなインドネシアでの様々な自然由来の素材を用いて新型コロナウイルス感染症への対応策についての取り組みを紹介する。

発表３

「With コロナ時代の都市農業の新たな可能性」

高取 千佳

九州大学　芸術工学研究院
准教授

概要

新型コロナウイルス禍において、「3 密」を避ける働き方・暮らし方へと転換する中で、「都市農業」の役割が見直されている。直売所での新鮮な地元野菜との出会いや、体験農園など身近な農に触れる機会が増えたことで、レクリエーショナルな利用としての都市農業への需要が高まりを見せている。また、農業と他の仕事を組み合わせた働き方である『半農半X』等の副業としての新たな農ビジネスも注目され始めている。こうした中、「空間」と「人」をマッチングし、都市と田園の新しい関係性を創造していくことが求められている。発表者はこれまで、名古屋都市圏を対象とし、「管理作業量」という指標を基に、都市～郊外～中山間部の環境傾度に応じた「空間」の管理必要量と「人」の利用需要のマッチングの可能性を評価する研究を行ってきた。特に、郊外部・北名古屋市では、都市農業公園や生産緑地を活かした体験農園等の政策提案を進めている。本日は、以上の研究の進捗について発表し、with コロナ時代の都市農業の新たな可能性について議論したい。

発表４

「Beyond Coronavirus（ビヨンド コロナウイルス）を見据えた福岡の都市圏戦略」

天野 宏欣

Local Knowledge Platform 合同会社
代表社員

概要

福岡地域戦略推進協議会（FDC）は、福岡地域の成長戦略の策定から推進までを一貫して行う産官学民一体のシンク＆ドゥタンクである。2011 年に策定された FDC の地域戦略は、福岡地域を国際的なビジネス交流・開発・営業拠点として「東アジアのビジネスハブ」を築くことを目標に、MICE などの交流人口の増加を積極的に推進し、地域の成長を実現してきた。

2019 年度に成長戦略の改定が進められたが、コロナ禍を受け、社会経済の実情と変化にあった再修正を検討している最中である。地域戦略修正にあたっては、既に起きている変化の把握、将来の変化の想定、戦略修正において前提にすべき変化の設定、前提に置いた変化に対応する個別の取り組みの検討、といったプロセスを、地域の社会経済主体間のコンセンサスを把握しながら進めている。

国際テレカンファレンス

〈テーマ〉 アジア・オセアニア地域におけるコロナ対策の現況

森山 智彦

九州大学病院 国際医療部／九州大学 病態機能内科学
准教授
／医療・健康クラスター

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は各国の医療のみならず、その他の分野にも壊滅的なダメージを与えた。感染拡大防止のため、多くの人々が集まる都市部を中心にロックダウンや移動制限が行われ、経済だけでなく文化、教育なども深刻な影響を受け続けている。マスメディアによって扇情的に流布される情報により経済活動はますます縮小し、貧困層を中心に雇用状況は厳しさを増している。このウイルスに対して社会全体としてどう対峙するかがこれからの経済回復へむけたカギとなる。本セッションでは様々な分野の専門家をアジア・オセアニア地区から招聘し、それぞれの分野が受けた影響について講演をいただき、この疾患に対する対策や「ニューノーマル」における持続可能な社会作りについて参加者全員で考えたい。

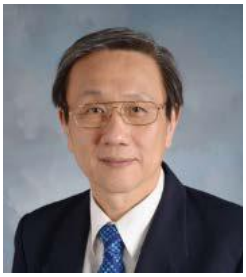
国際テレカンファレンス

<日　時>　2020 年 9 月 3 日（木曜日）13:30-15:00
<場　所>　オンライン形式、九州大学伊都キャンパス 椎木講堂 コンサートホール
<言　語>　日本語 および 英語（同時通訳あり）
<テーマ>　アジア・オセアニア地域におけるコロナ対策の現況
<プログラム及び講演者>

時間	プログラム・講演者
13:30-13:33	**◆開会の辞** 森山 智彦 准教授（九州大学病院 国際医療部／九州大学 病態機能内科学／医療・健康クラスター）
13:33-13:43	**◆発表１： 医療** **タイにおける COVID-19 の現状：感染拡大に対する対策** Prasit Watanapa 教授（Mahidol University）［タイ］
13:43-13:53	**◆発表２：文化** **台湾における COVID-19 感染症対策とソーシャル・メディアの反応** Husan-Lei Shao 准教授（Taiwan Normal University）［台湾］
13:53-14:03	**◆発表３：経済** **ポストコロナにおける廃電子機器および廃電池のリサイクル：インド洋・太平洋域の好機** Jacques Eksteen 教授（Curtin University）［オーストラリア］
14:03-14:13	**◆発表４：都市** **スリランカにおける都市のレジリエンス向上と都市計画の課題** Padma Weerakoon 教授（University of Sri Jayewardenepura）［スリランカ］
14:13-14:23	**◆発表５：防災** **コロナ禍による低所得世帯への不均等な影響―シンガポールの事例―** Stephanie Chok 副所長（Beyond Social Services）［シンガポール］
14:23-14:33	**◆発表６：教育** **インドネシアの資源関係大学における講義の現状－バンドン工科大学の例－** Ganda Marihot Simangunsong 准教授（Institut Teknologi Bandun）［インドネシア］
14:33-14:57	**◆全体討論（オンライン投票システムを用いて）**
14:57-15:00	**◆閉会の辞**

発表１： 医療

「タイにおける COVID-19 の現状：感染拡大に対する対策」



Prasit Watanapa

Dean, Faculty of Medicine, Mahidol University

発表２：文化

「台湾における COVID-19 感染症対策とソーシャル･メディアの反応」

Husan-Lei Shao

Associate Professor,
Department of East Asian Studies, Taiwan Normal University

概要

Social media is often regarded as a mini-society, then Researchers can also observe social changes through social media. Especially in recent epidemic (COVID-19), we can more deeply feel the difference between today and other days before. We are also confusing where shall we go in the post-COVID-19. Therefore, this article attempts to observe how Taiwanese society perceives the epidemic messages, how its emotions and what reactions are? We collect over 140,000 Chinese posts on Facebook which contents about “COVID-19” during 2020/1/1-2020/3/15, then cluster them as five main groups by Latent Dirichlet Allocation. After text-mining and sorting those groups, we can observe their ups and downs by time series. This article can observe the situation of the epidemic situation in Taiwan and provide the information needed for decision-making on ”epidemic prevention, development and governance.

Keywords: COVID-19, Facebook, Text Mining, Latent Dirichlet Allocation, Governance

発表３：経済

「ポストコロナにおける廃電子機器および廃電池のリサイクル：インド洋･太平洋域の好機」

Jacques Eksteen

Professor,
1. Western Australian School of Mines, Minerals, Energy and Chemical Engineering, Curtin University
2. Future Battery Industries Cooperative Research Centre Ltd, Australia

概要

As the world is battling with the Covid-19 pandemic, it has strengthened introspection into our global sourcing, manufacturing, and trade practices. In particular, the principle that the dominant part of the of the world manufacturing and processing is dominated by a small number of countries is being revisited as the world's countries realized that robustness, resilience and redundancy are required to ensure stable and reliable supply chains with multiple alternative routes of ethical and environmentally responsible sourcing of resources and energy.
In the area of metals, minerals and materials sourcing, processing, and refining, and concomitant energy requirements it is useful to look at opportunities in Japan and Australia as two long-standing trading partners. The area of "urban mining", i.e. the recycling of metalliferous waste and electric and electronic waste (of which batteries is an important subset) poses interesting opportunities and challenges, where Japan and Australia can fulfil complementary functions.
The developments in new hydrometallurgical chemistries such as leaching with organic acids, ionic liquids and biochemical and bio-hydrometallurgical approaches are opening novel pathways to process smaller amounts of electrical and electronic wastes, without the need of smelting facilities. In addition, the acceleration of the hydrogen economy and the large-scale industrial use of hydrogen that can be derived from renewable sources allows us to consider far more environmentally benign pathways of production and recycling. Our knowledge of mineral processing allows us to extrapolate the separation methods to separate components from electronic waste and batteries so that the maximum amount of metals can be recovered and recycled, as well as specialist materials such as the graphite anode materials from batteries. To ensure true circularity, hydrometallurgical approaches are important in order not to lose metals and valuable materials to slags during smelting and combustion. For lithium ion batteries, this implies that we should recover the graphite, lithium, nickel, cobalt, manganese, aluminium and copper from the batteries, as well as the electrolyte and solvents where possible. For electronic wastes such as printed circuit boards (part of the battery management systems of battery packs, but also ubiquitous in all electronics), gold, silver, palladium, copper, and tin are valuable extractable metals. The removal of all heavy metals from plastic substrates is important from an environmental perspective to ensure that the final plastics can either be repurposed, upcycled, or used to generate energy from waste.
It is evident that the post-Covid-19 world cannot continue with the primary extraction of metals from ores, and that the only sustainable world is one where we recover and recycle our end-of-life materials to prevent them to become wastes, but rather than filling up toxic landfill sites or polluting our oceans.

発表４：都市

「スリランカにおける都市のレジリエンス向上と都市計画の課題」

Padma Weerakoon

Professor,
Department of Estate Management and Valuation,
University of Sri Jayewardenepura

概要

COVID-19 outbreak has created a great challenge in urban areas in Sri Lanka, in terms of linking the social and service networks in high-density urban areas with the urban periphery. Prevailing planning regulations and urban service patterns are inadequate to deal with this type of unforeseen challenge and it has become a major obstacle in urban planning in Sri Lanka. However, with the noticeable impacts on the collapsed network and associated issues, the government and policymakers, along with other professionals, are forced to explore novel approaches to re-connect the service network in urban planning to minimize future challenges in the urban areas. Unavailability of a sound, adaptable urban service network is a challenge for urban planning in an uncertain environment. Hence, it is time to rethink with a new vision and develop a structured, formal service network between the local and regional areas, connecting the entire country. COVID-19 has set out a space to use SMART resilience strategies to fill the gaps in our service network. This presentation mainly focuses on how to adopt appropriate SMART strategies in urban planning to coordinate a proper service network to minimize disruptions in future unexpected occasions.

発表５：防災

「コロナ禍による低所得世帯への不均等な影響―シンガポールの事例―」

Stephanie Chok
Assistant director, Beyond Social Services

概要

COVID-19 has exposed and deepened existing inequalities in many countries. In Singapore, the financial impact has been devastating, particularly for persons engaged in low-paid and precarious forms of work. At Beyond Social Services, a local charity that works with families living in public rental housing, we examine our research data—based on conversations with over 1,000 members—to share preliminary findings related to COVID-19 and its impacts on employment and household income. Interviews also indicate challenges in accessing state welfare, and causal relations between different forms of insecurity (economic, food, housing). Global predictions that the COVID-19 crisis will last at least a year point to the likelihood of cumulative impacts, including the deepening of multiple forms of insecurity for the poor, and increases in household debt.

発表６：教育

「インドネシアの資源関係大学における講義の現状－バンドン工科大学の例－」

Ganda Marihot Simangunsong

Associate Professor,
School of Mining & Pertoleum Engineering, Institut Teknologi Bandun

概要

Currently there are 64 mining schools in Indonesia. 41 schools are dedicated for undergraduate study program, and the rest are graduate and diploma study programs. The number of students registered in 2019 is around 15,000 students. In future it is expected there will be around 3,000 mining graduates per year. This statistical data indicates that mining is still a popular field for young generation in Indonesia. This large number of mining students must be treated responsibly.
Institut Teknologi Bandung (ITB) is the oldest school teaches mining since 1950. As a school that always becomes a reference for other schools in Indonesia, the current situation in ITB especially in Mining Engineering study program may be used to represent situation of other mining schools in this country. Since March 2020, almost all schools include ITB have restricted activities in campus to minimize the spread of Covid-19. Consequently, for the last half semester the learning process must be carried out through an online system. This sudden change of teaching method caused some weaknesses. Results of student survey indicate that 70% of students do not understand the course content delivered online.
Lecture in mining ideally cannot be done fully online because of several field activities include of excursion, field course and practical work. It remains different even though can be replaced by a virtual reality tour. Nevertheless, ITB has decided that the new semester starting from mid-August 2020 will still be held online. Therefore, preparation must be done to avoid unsatisfied level of student understanding. Lecturers are given training on how to prepare online lectures properly and must prepare teaching videos as part of a blended learning, a combination of online lecture between synchronous and asynchronous methods. The blended learning is considered the most suitable method, considering about 200 students according to the student survey are limited by internet connectivity at their residence.

若手研究者企画

〈テーマ〉　私たちの With/Post コロナ：新たな社会ニーズに対応した次世代研究ロードマップ ～分野を超えて次世代研究者が考える～

横田　文彦

九州大学　持続可能な社会のための決断科学センター
講師
/医療・健康クラスター

背景（Background）

COVID-19 の影響は、医療・健康分野以外の様々な分野に及んでおり、今こそ SDGs が問われ以前より良い持続可能な社会に変わろうとしている。これまでの常識を問い直し、新たな知識・価値を生むためには、本当に何が必要で、何が必要でないのか、どう変わるべきか。COVID-19 を乗り越え、2030 年までの国際目標である SDGs、さらにその先にある持続可能な社会を達成するためには、異分野・異文化間の強いパートナシップ、連携、チームワークが必要であると信じる。

目的（Objectives）

1. SDGs の視点から With/Post コロナ 1 年後、5 年後、10 年後、それ以降の日本と国際社会の変化とニーズを予想・予測し、どのような技術・スキル、研究方法（手法・アプローチ）、研究理論、研究協力・連携が必要か、異分野間の若手研究者の知識と経験を発表・共有する。

2. これらを考えることにより、以下の質問の答えを明らかにする。
   （1）新型コロナウィルス後の日本国内外社会は SDGs17 分野においてどのように変化し、若手科学者に対してどのような学術的ニーズが生まれて必要とされるか？
   （2）このような将来の社会変化や社会ニーズに対応し、2030 年までの SDGs達成貢献へと、2030 年後(Future SDGs)、自分の研究分野の新たな価値、知識、技術・スキル、方法、理論、協力・連携体制等を今からどのように準備していくべきか？

3. 次世代研究者が今後前向きに夢・希望・笑顔で研究活動できる次世代研究者ロードマップを発信・共有する。

若手研究者企画

<日　時>　　2020 年 9 月 3 日（木曜日）15:30-17:00
<場　所>　　オンライン形式、九州大学伊都キャンパス 椎木講堂 コンサートホール
<言　語>　　日本語 および 英語（同時通訳あり）
<テーマ>　　私たちの With/Post コロナ：新たな社会ニーズに対応した次世代研究ロードマップ～分野を超えて次世代研究者が考える～
<プログラム及び講演者>

時間	プログラム・講演者
15:30-15:33	**◆開会の辞** 横田 文彦 講師（九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター／医療・健康クラスター）
15:33-15:40	**◆発表１** **ポストコロナ時代の遠隔医療** 上田 真太郎 特任助教（九州大学病院 国際医療部 アジア遠隔医療開発センター）
15:40-15:47	**◆発表２** **新型コロナから考える体験型学習** 濵中 晃弘 助教（九州大学 工学研究院／資源循環クラスター）
15:47-15:54	**◆発表３** **新型コロナウイルス後の次世代学校づくりの課題** 範 懿 助教（九州大学 人間環境学研究院）
15:54-16:01	**◆発表４** **パンデミック～生態学の観点から～** 関 元秀 助教（九州大学 芸術工学研究院／生存基盤環境クラスター）
16:01-16:08	**◆発表５** **歴史から考える with/post コロナ～植民地期ベトナムにおける感染症流行とその対策～** 北田 瑞希 氏（九州大学 地球社会統合科学府 博士課程）
16:08-16:15	**◆発表６** **差別なき世界？：VR 技術とオンライン・コミュニケーションの可能性と限界** 大賀 哲 准教授（九州大学 法学研究院／文化変動クラスター）
16:15-16:35	**◆質疑応答**
16:35-16:40	**◆まとめ** 原田 明 機構教育統括（九州大学 副学長／総合理工学研究院 教授）
16:40-16:45	**◆閉会の辞** 横田 文彦 講師（九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター／医療・健康クラスター）

Presentation 1

「ポストコロナ時代の遠隔医療」

上田 真太郎

九州大学病院 国際医療部 アジア遠隔医療開発センター
特任助教

概要

COVID-19 の急速な拡大に伴う各国での物理的な移動制限により、あらゆる分野において国際交流が困難となっていが、この感染拡大に歯止めを掛けるためには国境を越えた知識や経験の共有が重要である。九州大学病院 アジア遠隔医療開発センターは最新の技術を用いて医療機関をインターネットで接続し、これまでに多くの国際遠隔医療教育を行ってきた。今回のコロナ禍においても我々は活動を止めることなく、医師それぞれが自宅からでも参加できる遠隔医療カンファレンスを開催し、各国における COVID-19 の現況や対策について議論を重ねてきた。また、ウィズコロナ時代における研究会や学術集会、医学生教育のあり方について、遠隔会議システムを応用した様々な試みを行っている。今後、これらの活動を医療以外の分野にも展開し、SDGs 達成へ向けた九州大学全体、そして世界全体での取り組みに活かしていきたい。

発表２

「新型コロナから考える体験型学習」

濵中 晃弘

九州大学 工学研究院
助教
／資源循環クラスター

概要

本発表では、コロナ禍による影響がさまざまある中での体験型学習に関する所見を述べる。発表者が所属する部門は、地球を対象とした鉱物資源・エネルギー資源の発見・採取・利用技術を学習＆研究する部門であり、机上の講義のみならず現地実習やインターンシップ学習などが重要であるが、現状、このような活動を実施することはほぼ不可能である。そこで、本発表では国内および海外の大学の一部で VR などの ICT 技術を導入している例を紹介するとともに、コロナ後も含めた体験型学習の発表者の所見を述べる。

発表３

「新型コロナウイルス後の次世代学校づくりの課題」

範　懿

九州大学　人間環境学研究院
助教

概要

新型コロナウイルスの拡散を防ぐため、多くの学校は教育方式や教育空間計画に関する様々な対策を実施しています。本研究は中国と日本における学校事例を分析することを通して、以下の二つの課題を明らかにすることを目的としている。一つ目は、今まで実施していた対策が新型コロナウイルスを防ぐには十分なのか？これらの対策は他の新しい問題を引き起こしたのか？2つ目は、新型コロナウィルス後の次世代学校づくりにおいては、どのような変革や研究課題に注目する必要があるのか？

結論と今後の展望では、以下の新型コロナウィルス後の次世代学校づくりに関する変化や課題をまとめた。

1）オンライン授業を行うには、まずハードウェア環境を改善する必要がある。
2）緊急事態に対処するためにより柔軟で開放的な教室が必要である。
3）廊下のスペースを広げ、様々な状況に対応できるようにする必要がある。
4）便利で効果的な空間計画の転換を行うことでクラスター感染を防ぐために、どのように柔軟で大規模な活動スペースを設計するのか？
5）ダイニングホール、会議センターやイベントスペースなどの他のキャンパススペースを臨時教室に転換させることにより、教育スペースの不足を解決するために、どのような創造的な対策を行うべきなのか？

発表４

「パンデミック～生態学の観点から～」

関　元秀

九州大学　芸術工学研究院
助教
／生存基盤環境クラスター

概要

スペイン風邪から新型コロナまで百年の間隔がありましたが、生態学者は新型コロナから次のパンデミックまでの間隔はそれほど長くないかもしれないと予測しています。我々は熱帯域の生物に興味をもっており、マレーシアやベトナムで調査を行ってきました。たとえば、昼夜の長さの季節変化が少ない熱帯域に生息する生物の概日時計（体内時計）は、よく研究されてきた温帯域生物の概日時計とは異なる性質をもつのではないかと我々は考えており、この仮説を検証するためにマレーシアで行った研究では複数種類の植物の葉を48時間連続でサンプリングしました。このような研究を海外出張が難しい期間にどのように継続するか、そのために平穏な期間にどのような準備が必要か、いくつかのアイディアを共有したいと思います。

発表５

「歴史から考える with/post コロナ～植民地期ベトナムにおける感染症流行とその対策～」

北田 瑞希

九州大学 地球社会統合科学府 博士課程

概要

21 世紀に入り、SARS やデング熱、エボラ出血熱、新型インフルエンザなどの感染症が流行したことは記憶に新しく、そして今は新型コロナウイルス感染症が私たちの生活、そして命を脅かしています。しかし、感染症は現代のみの問題ではなく、昔から存在し、人類の歴史は伝染病や疾病との戦いであったと言っても過言ではありません。様々な感染症がこれまで人々を何度も恐怖に追い込んできました。私は植民地医療史、とりわけ仏領インドシナのベトナムにおける感染症、医療、公衆衛生の歴史を明らかにする研究を行なっています。そこで、新型コロナウイルス感染症の対策について、歴史の観点から何が対策として変わった点なのか、どのような違いが見られるのかなどについてお話しいたします。

発表６

「差別なき世界？：VR 技術とオンライン・コミュニケーションの可能性と限界」

大賀 哲

九州大学 法学研究院
准教授
／文化変動クラスター